

# 意見陳述書

2016（平成28）年11月18日

佐賀地方裁判所民事部 御中

原告 窪島誠一郎

1 小生は当年七十五歳、現在長野県上田市で日中戦争、太平洋戦争に出征し戦死した画学生の遺作、遺品を展示する「無言館」という美術館を経営している者です。本日、日頃より玄海原発の再稼働について考えるところをもつ小生に、このような場をあたえてくださり心より感謝しております。

2 小生は現在では、かつての大戦によって絵描きになる夢を絶たれた若者たちの遺作を全国から収集し、それを展示する施設を営むという、一見平和運動の一端を担うかのような仕事をしておりますが、太平洋戦争開戦の昭和十六年に生まれた小生は、戦争を知っているようで知らない世代、物心ついた十代の後半頃には、わが国はすでに敗戦の対価としての高度経済成長時代に突入しておりました。

小生は高校卒業後いくつかの勤め先を転々としたあと、東京郊外で小さな酒場商売をはじめ、折からの「東京オリンピック」の招聘にわく経済成長の波にのり、その商売が思いがけず当たったことで、現在の生活の基礎を築くことができました。そして、わが国に初めて原子力発電所なる施設が登場したのも、その昭和三十年代終りから四十年代初めにかけてのことだったと記憶しています。

当時、若かった小生は自らの生活の経済的向上のみに魂を奪われ、朝早くから深夜までシェイカーをふりフライパンをゆする毎日のなかで、

自分が消費している電力の先に地方に乱立する原発の存在があることなど、これっぽっちも考えたことも意識したこともありませんでした。電気料を払えば電気は点く、ただそれだけのことでした。ただひたすら貧乏からの脱出を夢み、生活向上への欲望で頭をいっぱいにしていて二十代半ばのバーテン男には、その後わが国の原発政策がどのように進行し、その結果私たち庶民の生活にどのような影響をもたらすか、そうしたことを考える余裕も知識もなかったのです。

- 3 そんなノーテンキな経済成長の申し子のような男が、否応なく「原発とは何か」を考えるようになったきっかけは、戦時中の混乱期に生き別れし、戦後三十余年経って奇跡的に再会した父親である、作家の水上勉がログセのように「故郷福井県の若狭に建つ原発に恐怖を感じる」「過ちばかりの人間世界に、絶対安全神話などというものがあるだろうか」と語り、数多くの著作のなかで「チェルノブイリやスリーマイル島での悲劇を忘れたのか」と、原発の稼働について疑問を呈していたことからでした。恥かしながら、不肖の息子は三十四歳でめぐり会った父親の言葉から、これまでの自分がいかに「原発」に対して無知であり、無防備な態度で接してきたかを自問するようになったのです。

同時に、私たちが「原発」の存在をもう一度考えるということは、これまで私たちがあててきた経済効率と利便性のみを金料玉条とする生活の形そのものを見直すことであるようにも思えてきました。人間の幸福の何もかもが、経済の繁栄や物質的な充足によってみたされるという幻覚、私たちはそろそろそこから脱却せねばならないときなのではないか。「原発」を稼働するかしらないかは、そうした私たちの「生き方」そのものを改革するかしらないかという問いかけでもあるのではないかと考えるようになったのです。

- 4 そんな思いを決定的にしたのは、やはり二〇一一年三月十一日に発生

した東日本大震災、それによってもたらされた福島第一原子力発電所の爆発事故でした。このいわゆる「3.11」とよばれる未曾有の凶事は、多くの日本国民に「これまでの生き方でよかったのか」を問うものでした。私の知る多くの画家や作家、音楽家たちのなかにも、この「3.11」を境に、人間の力では抗しがたい自然の脅威と、いつのまにか私たちが陥っていた「文明」への過剰な依存を自戒し、その思いを芸術表現に反映させようと努める者が現れはじめました。父水上勉は、幸か不幸か、この事故を知らぬまま世を去りましたが、まさしく福島原発爆発事故は、「人間の営みに絶対安全などという神話はない」とっていた父の予言通りの悪夢の到来でした。

何より恐ろしいのは、研究者や地震学者が指摘するように、わが国は世界有数の地震国であり、日本列島ぜんぶが大地震発生の可能性をもつ環境にあることです。じっさい、東日本大震災の復興がまだ半ばにも達していないこの時期に、熊本、鳥取と立てつづけにマグニチュード六以上の大地震が発生しました。この国に楯比する五十基の「原発」は、つねにそうした砂上の楼閣といってもいい脆弱な地盤の上にあるといえるでしょう。

福島第一原子力発電所の爆発によってメルトダウンがおこり、放射能に住む場所を追われた人々がまだ十何万人もいます。加えて今も、原発から流れ出る汚染水や汚染土、核のゴミといわれるプルトニウムの保管場所を、国内で「盪回し」にしているというのが現状です。政府は、二コトめには「万一事故があればクニが責任をもつ」といっていますが、五年前の福島の後始末さえできていない政府が、今後おこるかもしれない事故に対してどう責任をとるといえるのでしょうか。

一度事故をおこせば、だれにも責任のとれない壊滅的な被害をもたらすのが「ゲンパツ」であることを、私たちは福島事故でイヤというほ

ど学んだはずではないですか。今後もし、このような事故が日本のどこかでおこったときには、いくら政府や為政者の人々が土下座をして謝ったとしても、もう手遅れなのです。

- 5 リアス式の美しい玄海灘の海岸は、訪れるだれの心をもなぐさめる南国の海景色であり、小生に「無言館」建設のきっかけをあたえてくれた福岡在住の、本年九十六歳、戦争で多くの仲間を失った喪失感を作品にしつづける野見山暁治画伯の愛する風景でもあります。昭和五十年値賀崎に九州最初の玄海原子力発電所が設けられていらい、この美しい海岸が放射能に侵される日だけはむかえてならない、と祈りつづけて参りました。本日の、このつなたい意見陳述が、私たちの「新しい明日の日本」を築く一助になってくれればと念じるばかりです。

以上